

# 社会的問題解決方略に関する中国と日本の比較

羅 蓮萍\*・名島潤慈・堂野佐俊\*\*

Comparison of the Strategy for Social-Problem-Solving between China and Japan

Lian-Ping Luo\*・Junji NAJIMA・Satoshi DOHNO\*\*

(Received September 28, 2007)

## 1. 問題および目的

社会的問題解決とは、社会的相互作用の中で「自己の人格的目的を達成するための自己主張および自己抑制の過程」と定義されている（東・野辺地, 1992）。自己主張および自己抑制に関する比較文化的研究は、主として、日米間とか日英間といった東洋と西洋の文化的特徴の差異という枠組みの中で以前から多くの注目を集め、成果も挙げてきている（柏木, 1988；箕浦, 1990；吉武, 1991；東洋, 1994；佐藤, 1991, 1993, 1994, 2001）。徐（2004）は、米国と韓国の間、カナダと韓国の間における比較研究はあったが、同じ東洋文化圏に属する日本と韓国との間における比較研究はあまり行われていないと指摘し、小学校5・6年生を対象にして子どもの社会的問題解決方略に関する日韓比較研究を行った。その結果、韓国の児童は日本より全体的に直接的主張、直接的攻撃および間接的方略を多く用い、日本の児童は韓国より抑制的方略を多く用いる傾向を見出している。これは、「親愛のコミュニケーション方略」を用いる傾向の高い韓国の児童が対人葛藤場面においても自分の感情を直接的・間接的に表出しやすく、「思いやりのコミュニケーション方略」を用いる傾向の高い日本の児童が相手を傷つけないように自分の感情を抑制する傾向が高いということを表している。

このように、東洋と西洋という文化の枠組みのみならず、同じ東洋文化圏に属する日韓間にも問題解決方略において差異が見られる。日本と中国は地理、歴史、言語文化、社会制度など様々な面において異なっており、問題解決方略においてもそれぞれの特徴があると思われる。しかし、社会的問題解決に関する日中比較研究は今日まであまり見られない。さらにまた、従来の社会的問題解決に関する比較研究はほとんどが横断的なものであり、縦断的な視点で考察したものはあまり見られない（羅・堂野, 2005を参照）。

以上のような先行研究の現状を踏まえて、本研究では、仮想的な対人葛藤場面を設定し、日本と中国の小学生・中学生・高校生・大学生を対象として、各発達段階における社会的問題解決方略について比較検討することにした。対象とした小学生・中学生・高校生・大学生に対する質問の項目は、各々の発達段階を考慮した表現に配慮はしたものの、内容は同一のものとした。日中間の質問項目は全く同じであり、中国における調査の場合には、後述するように、慎重な手続きのもとに、本来の内容が伝わるように中国語に翻訳して質問項目を作成した。

---

\*山口大学大学院東アジア研究科

\*\*山口学芸大学教育学部

## 2. 方法

### (1) 対象地域

本研究の対象地域として、中国においては江西省、日本では山口県を取り上げることにした。江西省は中国南部の内陸に位置し、古来「魚米之郷」として栄え、新中国成立後も「革命の根拠地」として重用されてきた。しかし、改革開放後は、経済的にも意識的にもそれほど発展している地域とはなっていない。見方を変えれば、伝統的な文化や意識はまだ残されている地域といえよう。一方、日本における山口県の場合も同様の位置づけになると考えられる。

### (2) 調査時期

本調査における質問項目の検討に資するため、予備調査として、中国において2006年2月、日本において2006年3月に、高校生を対象として行った。本調査は、全対象者に対して、中国では2006年4月、日本では2006年5～7月に実施した。

### (3) 質問紙の構成および手続き

6つ（大学生は5つ）の対人葛藤場面を設定し、それぞれの場面には、葛藤を提示した上、実際に例示した各種の方略通りに行動する可能性、その葛藤場面の自分にとっての重要性について質問した。方略通りに行動する可能性については、「いつもこのようにする（4点）」から「そうすることが全くない（1点）」までの4件法により評定させた。重要性については、「とても重要（4点）」から「全く重要でない（1点）」までの4件法により評定させた。

本研究は比較文化的な性質を持つものであり、用いる言語の問題は結果に影響を及ぼす隠れた要因になることが考えられる。したがって、質問項目の言語化には特に配慮した。つまり、対象者は中国と日本に在住している子どもたちであり、彼らにとって可能な限り同じ内容の質問項目となるように日本語を中国語に翻訳した。翻訳にさいしては、筆者が翻訳した上で、中国の大学の日本語科教授を含む3人の合議により確定した。

実施に当たっては、原則として、集団で一斉に回答をさせて回収するという方法を用いた。ただし、日本での1高校のみは配布後持ち帰って個別に回答したものを学校で回収した。また、小学生に対しては、質問項目の内容理解および進行の統制のため、担任の教師が読み上げながら回答を記入するという方法をとった。

### (4) 対人葛藤場面の作成

社会的問題解決方略の採用には、葛藤の内容、問題解決の目標、当事者の文化背景、性別、年齢、社会的支配性、知能、社会的評価、柔軟性など様々な要因が絡み合って影響している。当事者相互の仲間親密性、対人間地位などの相互関係による影響も多くの研究から指摘されている（嘉数ら, 1991；金城・梅本, 1991；小森・宮本, 1992；倉持, 1992）。問題場面の状況性が解決の方略を大きく左右することも明らかになってきている（吉野, 1987；二神・神谷, 2004；徐, 2004, 2005）。

以上のような先行研究および日本と中国の事情などを考慮し、本研究では、Table 1 に示したとおり、クラスの中の同性の友達（親友という意味ではなくて、普通に話せる友人）との「持ち物の損害」、「意見の対立」、「権利の侵害」、「名誉の侵害」、「役割の怠惰」、先生との「意見の対立」という6つの対人葛藤場面を作成した。

潜在要因の影響を抑制するために、葛藤場面の作成にさいしては以下のような点を考慮した。  
①葛藤はできるだけ日本と中国の両方の学校生活の中で馴染みがあり理解しやすい内容のものとして設定する。  
②葛藤は、1対1の中での人間関係で、相互関係が明確となるように設定す

る。③葛藤の責任所在が相手であることを明示する。④できるだけ価値観や常識的判断が入らないように、中立的かつ客観的に葛藤事実を述べる。⑤より明確に変化や相違を反映させるため、葛藤はあまり深刻でない内容に設定する（深刻な葛藤は対決方略に集中してしまう可能性が高くなると考えられる）。

Table 1 対人葛藤場面

番号	分類	葛藤内容
場面1	持ち物の損害	廊下に立っているあなたにクラスの友達がぶつかってきて、あなたのメガネは落ちて、壊れてしまいました。友達は「すみません」と言ってから、立ち去ろうとしました。
場面2	級友との意見対立	昼休み、好きな本を借りて読んでいると、クラスの友達がそばに来て、「本はやめて、外で遊ぼう」と言いました。あなたは本が読みたくて一度断りましたが、その人は依然として誘い続けました。
場面3	権利の侵害	あなたはクラスのコンピューターを使うために長い間待ち、やっとあなたの番になりました。あなたはコンピューターを動かし始めましたが、資料を探すために、少しの間離れました。戻ってくると、次の番の友達がコンピューターの前に座り、「もう僕（私）が使っているのだから、じゃまをしないでよ」と言いました。
場面4	名誉の損害	ある日、あなたが教室に入ろうとすると、クラスの友達があなたの悪口を言っているのが聞こえました。
場面5	役割の怠惰	あなたのクラスでは、教室の掃除当番を放課後2人ですることになっています。今日、あなたは既に掃除を始めたのに、相手の友達はまだ知らないふりで他の人と遊んでいます。
場面6	先生との意見対立	クラスで役割分担を決める時、先生から体育係をやってくれと頼まれました。あなたは他の係りになりたいと思っていたので、「ぼく（私）には無理だ」と遠慮しましたが、先生は「君ならできる」と言いました。

### (5) 社会的問題解決方略の分類

社会的問題解決方略の分類は、研究の目的や視点、葛藤場面の内容などによって多様であり、方略の数やカテゴリー、さらには定義そのものもさまざまである(子安・鈴木, 2002; 徐, 2004; 羅・堂野, 2005)。

Albert & Emmons (1970) は、対人反応のパターンを主張的反応、非主張的反応、攻撃的反応の3種類としている。主張的反応は、相手の権利を侵害しない範囲内で自分の考えや感情を素直に表現することである。非主張的反応は、自分の考えや感情を抑えて外に出さず、自分の権利が侵害されていても我慢して何も言わないことである。攻撃的反応は、自分の考えや感情を強く表出し、相手の権利を侵害したり無視したりすることである。Phelps & Austin (1975) は攻撃的反応を直接的攻撃と間接的攻撃に分類している(間接的攻撃は、相手に直接表現せず、いやな表情や身振りをして間接的に伝える行動)。徐(2004, 2005) は、社会的問題解決方略を直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難の7つに分類している。また、直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容を「直接的方略」、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難を「間接的方略」と大別している。

以上のような先行研究および日本と中国の事情を参照し、本研究では、Table 2 に示すとおりに分類した。徐(2004, 2005) は、背後の非難を抑制的受容とともに非主張的反応とし、背

後の非難は社会性の否定的な側面で、抑制的受容は社会性の肯定的な側面とした。本研究は背後の非難（背後攻撃）も相手の名誉や人間関係に負の影響を及ぼすものと考え、「間接的攻撃」の一つとみなすことにした。

日米などの比較研究においてはジャンケン志向という日本独自の傾向が見出されている（金城・梅本, 1991；渡部, 1993；山岸, 1998）。日本においてジャンケンが志向される理由として、低学年では「早く決まるから」、中学年では「喧嘩にならないから」、高学年では「公平、平等だから」といった反応が顕著であった。梶田（1988）は、対人葛藤解決のスタイルとして、欧米では他譲志向（他者を譲歩させる）が優位であるのに対して、日本では伝統的に無譲志向（無問題化）や状況離脱志向（「なかったことにしよう」「誰も傷つけないようにしよう」という意識）、さらには「自他の顔が立つよう工夫する」「妥協する」「考えないようにする」といった解決法が優位を示すと述べている。両者共に引き下がらずにそのまま安易に解決に至ろうとするジャンケン志向は、梶田の言う無譲志向に包含されるものと考えられる（金城・梅本, 1991）。では、同じ東洋圏に属する中国ではどうであるのか。果たしてジャンケン志向は日本独自の傾向であるのか。このことについて解明するため、場面2および場面3にジャンケン方略を設定した。また、権威志向の日中間の相違および発達の変化について検討するため、場面1および場面3～5に「先生に言う」という「先生頼り」方略を設けた。なお、葛藤の性質により、各場面に共通する方略のほか、その場面に適合する独自の方略が存在することも考えられる。予備調査の際、例示した方略がいずれも選択されなかったこともあり、本調査では、以上の方略の他に、場面1では相手の非故意のために抑制的方略を取る「非故意性抑制」方略、場面3では自分が離れたことが悪いと思って抑制的方略を取る「自己責任抑制」方略、場面4では悪口を言う人には何も言う必要がないと考えて抑制的方略を取る「無意義抑制」方略、場面6では他の適任と思う人を薦めるという「間接的主張」方略を付け加えた。

Table 2 社会的問題解決方略の分類と定義

攻撃的方略	直接的攻撃	叩くや怒鳴るなど、自分の考えや感情を強く表現し、相手に攻撃性を示す
	表情攻撃	言葉で相手を攻撃せず、いやな表情や身振りをして間接的に伝える
	間接的攻撃	直接的には表現せず、陰で第三者に不満を漏らす
	断絶攻撃	直接的には表現しないが、内心は不満を感じ、相手との関係を徐々に絶つ
主張的方略	直接的主張	攻撃性を示さず、説得や取引など言葉で自分の考えや感情を素直に伝える
	間接的主張	直接言わず、暗示的に自分の考えや感情を伝える。
抑制的方略	関係重視抑制	相手との関係を重視するため、自分の要求や感情を抑える
	騒ぎ回避抑制	騒ぎになることが恥ずかしいため、自分の要求や感情を抑える

### （6）対象者の構成

中国においては、学校の規模がかなり大きく、一定の資料を得ることが可能と考え、小学校・中学校・高等学校・大学それぞれ1校に依頼して調査を実施した。日本においては、小学校6校、中学校4校、高等学校3校、大学1校を対象とした。中国と日本の高校はいずれも普通校である。大学はいずれも医学部、工学部を含めた総合大学である。最終的に、Table 3に示す

ような有効回答を得ることができた。

中国においては、小・中・高・大学生のいずれも男子のほうがやや多かった。日本においては、中学生・高校生は男子のほうがやや多かったが、他は男子のほうがやや多かった。

中国でも日本でも今日における教育制度、教育課程は「6・3・3」制となっており、両国ともに小学校・中学校は義務教育となっている。今回は対象の学年を小学校4年、中学校2年、高校2年、大学3年と指定したため、小学校では9・10歳、中学校では13・14歳、高校では16・17歳、大学では20・21歳が中心となっている。ただし、中国と日本では学年の始期が異なるため（中国は9月1日、日本は4月1日が学年の開始）、日本の子どもの方がやや年少者が多くなっている。また、中国においては「飛び級」や「留年」なども認められており、年齢の開きがやや大きくなっている。

Table 3 調査対象の校種および性別 (%)

	中国				日本			
	男	女	NA	実数(人)	男	女	NA	実数(人)
小学校	56.8	43.0	2.3	435	52.1	47.9		453
中学校	50.7	44.9	4.4	546	47.2	52.8		422
高校	54.8	43.4	1.8	571	47.5	52.5		495
大学	51.0	45.9	3.1	577	50.8	47.5	1.7	590

### 3. 結果

以下、発達段階ごとに場面差について、場面ごとに性差および発達的变化について、日中間で比較検討する。ちなみに、以下の図や表のなかの各方略および場面は、次のように省略名にした。つまり、直接的攻撃は「直攻」に、表情（態度）攻撃は「表情攻」に、背後攻撃は「背後攻」に、断絶攻撃は「断絶攻」に、直接的主張は「直主」に、間接的主張は「間主」に、関係重視抑制は「関係抑」に、騒ぎ回避抑制は「騒ぎ抑」に、非故意性抑制は「非故意抑」に、ジャンケンは「ジャン」に、先生頼りは「先生」に、持ち物の損害場面は「持ち物」に、級友との意見対立場面は「意見1」に、権利の侵害場面は「権利」に、名誉の侵害場面は「名誉」に、役割の怠惰場面は「役割」に、先生との意見対立場面は「意見2」にするといった具合に省略したものを図表のなかに示した。

#### 3-1 場面差に関する日中比較

小学生、中学生、高校生、大学生に分けて、国と場面の2要因に関して多変量分散分析(ANOVA4)を行い、日中間、場面間で比較分析する。

Table 4は小学生による社会的問題解決方略と重要度の評定値である（下位検定で日中間有意差が見られた項目は表中に示してある）。紙数のため、中学生、高校生、大学生による社会的問題解決方略と重要度の評定値の表示は省く。

##### (1) 小学生における比較

小学生においては、Table 4に見られたように、日中間、場面間、国×場面の交互作用はほとんどの方略において有意差を示した。

日中間では、直接的攻撃、断絶攻撃、直接的主張、間接主張、関係重視抑制、先生頼り、ジャ

ンケンの各方略において、日本のほうが有意に高い。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面における直接的攻撃、直接的主張は中国のほうが有意に高い。騒ぎ回避抑制において、中国のほうが有意に高い。表情攻撃、背後攻撃において、日中間で全体的に有意差が見られなかったが、下位検定の結果、先生との意見対立場面における表情攻撃、役割の怠惰場面における背後攻撃は日本のほうが有意に高い。重要度においても、全体的には日本のほうが有意に高いが、下位検定の結果、級友との意見対立場面、先生との意見対立場面においては中国のほうが有意に高い。

Table 4 小学生の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		持ち物	意見 1	権利	名誉	役割	意見 2	F(国)	F(場面)	F(国×場面)
直攻	中国	1.67	1.91****	1.90	1.84	2.34	1.19	5.12*	173.52****	32.72****
	日本	1.72	1.52	1.99	2.07****	2.44	1.67****			
表情攻	中国	2.01+	1.81	2.06	2.11	1.89	1.67	0.00	21.41****	5.18****
	日本	1.89	1.87	2.04	2.02	1.86	1.87****			
背後攻	中国	1.68	1.51	1.67	1.80	1.65	1.6	3.215	33.373****	3.867***
	日本	1.77	1.46	1.77+	1.91+	1.85****	1.603			
断絶攻	中国	1.52	1.46	1.51	1.65	1.49	1.26	56.73****	69.98****	15.95****
	日本	1.76****	1.53	1.82****	2.29****	1.79****	1.53****			
直主	中国	1.93	2.62*	2.26	2.40	2.90	2.40	10.62***	121.16****	7.27****
	日本	2.03	2.47	2.55****	2.48	3.10****	2.65****			
間主	中国	2.09	1.98	1.78	2.14	1.92	1.86	37.22****	14.71****	11.62****
	日本	2.31****	2.24****	2.06****	2.04	2.44****	2.09****			
関係抑	中国	2.06	1.99	1.97	1.81	2.02	2.26	4.32*	30.57****	6.79****
	日本	2.43****	2.02	1.89	1.84	2.18*	2.24			
騒ぎ抑	中国	1.98	1.86	2.07****	1.88	1.80+	2.06*	2.96+	13.66****	6.57****
	日本	2.07	1.96+	1.82	1.78	1.69	1.89			
先生	中国	2.09		1.69	1.98	2.03		104.79****	28.50****	16.47****
	日本	2.59****		2.38****	2.65****	2.23***				
ジャン	中国		1.63	1.92				3.88*	60.52****	0.28
	日本		1.72	2.04						
重要度	中国	2.45	2.87****	2.42	2.71	2.39	2.53*	16.86****	34.33****	46.75****
	日本	3.01****	2.40	2.61****	3.15****	2.78****	2.39			

+ p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.005, \*\*\*\* p<.001

場面間では、直接的攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、先生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、日本においては、級友との意見対立場面が最も低く、他の場面より有意に低い。表情攻撃において、名誉の侵害および権利の侵害場面が他の場面より有意に高く、先生との意見対立場面および級友との意見対立場面が他の場面より有意に低い。背後攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。断絶攻撃において、名誉の侵害場面が最も高く、先

生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。直接的主張において、役割の怠惰場面が最も高く、持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。間接的主張において、持ち物の損害、役割の怠惰、級友との意見、名誉の侵害の各場面が先生との意見対立場面および権利の侵害場面より有意に高い。ただし、下位検定の結果、名誉の侵害場面は中国では最も高いが、日本では最も低い。関係重視抑制において、先生との意見対立および持ち物の損害場面が最も高く、権利の侵害および名誉の侵害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。騒ぎ回避抑制において、持ち物の侵害場面が最も高く、名誉の侵害および役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、権利の侵害場面は中国では最も高いが、日本では名誉の侵害および役割の怠惰場面と同様に、他の場面より有意に低い。級友との意見対立場面は中国では名誉の侵害および役割の怠惰場面と同様に、他の場面より有意に低い。先生頼りにおいて、持ち物の損害および名誉の損害場面が最も高く、権利の侵害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、役割の怠惰場面は中国では権利の侵害場面より有意に高いが、日本では権利の侵害場面より有意に低く、両場面が逆転している。ジャンケンにおいて、権利の侵害場面が級友との意見対立場面より有意に高い。重要度において、名誉の侵害場面が最も高く、先生との意見対立および権利の侵害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面は中国では最も高いが、日本では先生との意見対立と同様に、他の場面より有意に低い。

## (2) 中学生における比較

中学生においても小学生と同様、日中間、場面間、国×場面の交互作用はほとんどの方略において有意差を示した。

日中間では、直接的攻撃、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接主張、先生頼りの各方略において、日本のほうが有意に高い。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面における直接的攻撃は中国のほうが有意に高い。騒ぎ回避抑制において、中国のほうが有意に高い。間接的主張、関係重視抑制、ジャンケンにおいて、日中間全体的に有意差が見られなかった。下位検定の結果、持ち物の損害および権利の侵害場面における直接的主張は中国のほうが有意に高いが、級友との意見対立および先生との意見対立場面における直接的主張は日本のほうが有意に高い。権利の侵害および先生との意見対立場面における関係重視抑制は中国のほうが有意に高いが、級友との意見対立および名誉の侵害場面における関係重視抑制は日本のほうが有意に高い。重要度においても、全体的には日本のほうが有意に高いが、下位検定の結果、級友との意見対立場面および名誉の侵害場面においては中国のほうが有意に高い。

場面間では、直接的攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、先生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、日本においては、級友との意見対立および持ち物の損害場面が最も低く、他の場面より有意に低い。表情攻撃において、名誉の侵害、持ち物の損害および権利の侵害場面が他の場面より有意に高く、級友との意見対立場面が他の場面より有意に低い。背後攻撃において、権利の侵害場面が最も高く、持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面は、中国においては最も低い。日本においては権利の侵害および先生との意見対立場面と同様に、他の場面より有意に高い。断絶攻撃において、権利の侵害場面が最も高く、持ち物の損害および先生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。間接的主張において、名誉の侵害場面が最も高く、先生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。間接

的主張において、名誉の侵害場面が最も高く、権利の侵害および役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。関係重視抑制において、持ち物の損害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。騒ぎ回避抑制において、先生との意見対立および持ち物の侵害場面が最も高く、名誉の侵害および役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面は中国では最も高いが、日本では名誉の侵害および役割の怠惰場面と同様に、他の場面より有意に低い。先生頼りにおいて、持ち物の損害が最も高く、権利の侵害および役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、役割の怠惰場面は中国では名誉の侵害および持ち物の損害場面と同様、他の場面より有意に高いが、日本では最も低くなっている。ジャンケンにおいて、権利の侵害場面が級友との意見対立場面より有意に高い。重要度において、名誉の侵害場面が最も高く、役割の怠惰および持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面は中国では名誉の侵害場面に続いて高いが、日本では最も低くなっている。

中学生は小学生に比べ、日中間では、中国の直接的主張、関係重視抑制の伸びが大きく、日中間有意差がなくなった。日本の表情攻撃、背後攻撃の伸びが大きく、日中間有意差が見られた。場面間では、権利の侵害に対して、背後攻撃、断絶攻撃の伸びが大きく、すべての場面において最も高くなっている。名誉の侵害に対して、直接的主張の伸びが大きく、すべての場面において最も高くなっている。

### (3) 高校生における比較

高校生においては、小中学生と同様、日中間、場面間、国×場面の交互作用はほとんどの方略において有意差を示した。

日中間では、背後攻撃、断絶攻撃、間接主張、関係重視抑制、ジャンケンの各方略において、日本のほうが有意に高い。ただし、下位検定の結果、持ち物の損害場面における背後攻撃、名誉の侵害場面における間接的主張は中国のほうが有意に高い。騒ぎ回避抑制において、全体的には中国のほうが有意に高いが、下位検定の結果、先生との意見対立場面においては日本のほうが有意に高い。直接的攻撃、表情攻撃、直接的主張、先生頼りの各方略において、日中間全体的に有意差が見られなかった。下位検定の結果、権利の侵害および役割の怠惰場面における直接的攻撃は中国のほうが有意に高いが、名誉の侵害および先生との意見対立場面における直接的攻撃は日本のほうが有意に高い。持ち物の損害および名誉の侵害場面における表情攻撃は中国のほうが有意に高いが、級友との意見対立および先生との意見対立場面における表情攻撃は日本のほうが有意に高い。級友との意見対立、権利の侵害および先生との意見対立場面における直接的主張は中国のほうが有意に高いが、持ち物の損害、名誉の侵害場面における直接的主張は日本のほうが有意に高い。重要度においても、全体的には日本のほうが有意に高いが、下位検定の結果、級友との意見対立場面においては中国のほうが有意に高い。

場面間では、直接的攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、先生との意見対立および持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。表情攻撃において、名誉の侵害および権利の侵害場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。背後攻撃において、権利の侵害および名誉の侵害場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、中国では持ち物の侵害場面は名誉の侵害に続いて高いが、日本では最も低くなっている。断絶攻撃において、権利の侵害場面が最も高く、持ち物の損害および先生との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。



直接的主張において、役割の怠惰場面が最も高く、持ち物の損害および権利の侵害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。間接的主張において、先生との意見対立および名誉の侵害場面が高く、権利の侵害および役割の怠惰場面が低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、名誉の侵害場面は中国では最も高いが、日本では権利の侵害と同様に低くなっている。関係重視抑制において、持ち物の損害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。騒ぎ回避抑制において、持ち物の侵害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、先生との意見対立場面は中国では役割の怠惰場面が続いて低い、日本では最も高くなっている。先生頼りにおいて、権利の侵害、持ち物の損害および役割の怠惰場面が名誉の損害場面より有意に高い。ただし、下位検定の結果、権利の侵害場面は中国では最も高いが、日本では最も低くなっている。ジャンケンにおいて、権利の侵害場面が級友との意見対立場面より有意に高い。重要度において、名誉の侵害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低く、場面間に有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面は中国では名誉の侵害に続いて高いが、日本では最も低くなっている。

高校生は中学生に比べ、日中間では、中国の直接的攻撃、日本の先生頼りの下がりが大きく、中国の表情攻撃の伸びが大きく、日中間に有意差がなくなった。中国の関係重視抑制およびジャンケンの下がり大きく、日中間に有意差が見られた。場面間では、名誉の侵害に対して、直接的主張および先生頼りの下がり大きく、他の場面に有意に低くなっている。

#### (4) 大学生における比較

大学生においては、小中高年生と同様、日中間、場面間、国×場面の交互作用はほとんどの方略において有意差を示した。

日中間では、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、ジャンケンの各方略において、日本のほうが有意に高い。ただし、下位検定の結果、級友との意見対立場面における表情攻撃、持ち物の損害場面における断絶攻撃、名誉の侵害場面における間接的主張は中国のほうが有意に高い。騒ぎ回避抑制において、中国のほうが有意に高い。直接的攻撃、直接的主張において、日中間全体的に有意差が見られなかった。下位検定の結果、級友との意見対立、名誉の侵害および先生との意見対立場面における直接的攻撃は中国のほうが有意に高いが、持ち物の損害場面における直接的攻撃は日本のほうが有意に高い。権利の侵害および役割の怠惰場面における直接的主張は中国のほうが有意に高いが、持ち物の損害および名誉の侵害場面における直接的主張は日本のほうが有意に高い。重要度においても、全体的には日本のほうが有意に高いが、下位検定の結果、持ち物の損害場面においては中国のほうが有意に高い。

場面間では、直接的攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。表情攻撃において、持ち物の損害および名誉の侵害場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。背後攻撃において、持ち物の損害場面が最も高く、級友との意見対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。断絶攻撃において、権利の侵害場面が最も高く、持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、名誉の侵害場面は中国では最も高いが、日本では持ち物の損害場面が続いて低くなっている。直接的主張において、名誉の侵害場面が最も高く、権利の侵害および持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、権利の侵害場面は中国では名誉の侵害に続いて高いが、日本では最も低くなっている。間接的主張において、役割の怠惰場面が最も高く、権利の侵害が最も低く、場面間有意差が見

られた。ただし、下位検定の結果、名誉の侵害場面は中国では最も高いが、日本では最も低くなっている。関係重視抑制において、持ち物の損害および級友との意見対立場面が最も高く、役割の怠惰および権利の侵害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。騒ぎ回避抑制において、持ち物の侵害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ジャンケンにおいて、級友との意見対立場面が権利の侵害場面より有意に高い。重要度において、権利の侵害場面が最も高く、持ち物の損害場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、役割の怠惰場面は中国では最も低い、日本では権利の侵害場面について最も高くなっている。

大学生は高校生に比べ、日中間では、中国の表情攻撃の下がりが大きく、日中間の有意差がなくなった。中国の関係重視抑制およびジャンケンの下がりが大きく、日中間に有意差が見られた。場面間では、級友との意見対立に対する直接的攻撃の下がり大きく、すべての場面において最も低くなっている。持ち物の損害に対する背後攻撃の伸びが大きく、すべての場面において最も高くなっている。名誉の侵害に対する直接的主張の伸びが大きく、すべての場面において最も高くなっている。ジャンケンにおいては級友との意見対立場面が権利の侵害場面より有意に高く、高校生と逆転している。重要度では、権利の侵害場面が最も高く、高校生まで最も重要視されている名誉の侵害場面より上回っている。持ち物の損害が最も低くなっている。

Table 5 持ち物の損害場面における社会的問題解決方略と重要度の評定値

		小		中		高		大		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
直攻	中国	1.79****	1.52	1.77	1.74	1.65****	1.37	1.45	1.33	1.67****	1.49
	日本	1.85****	1.59	2.17****	1.65	1.81****	1.37	1.69****	1.43	1.88****	1.51
表情攻	中国	2.03	1.99	2.23	2.45****	2.51	2.53	2.28	2.52****	2.28	2.40***
	日本	2.02	2.07	2.54	2.50	2.45	2.51	2.49	2.59	2.37	2.44
背後攻	中国	1.72	1.63	1.94	2.07*	2.04	2.33****	2.05	2.47****	1.95	2.16****
	日本	1.73	1.80	2.38	2.59****	2.49	2.63****	2.51	2.95****	2.29	2.53****
断絶攻	中国	1.59*	1.42	1.51	1.56	1.59	1.65	1.69	1.91***	1.60	1.65
	日本	1.71	1.81	2.03	1.92	1.95	2.02	1.95	2.14**	1.91	1.98+
直主	中国	1.95	1.91	2.28+	2.14	2.01	1.96	1.95	1.96	2.05	2.00
	日本	1.92	2.15**	2.55**	2.32	2.50****	2.08	2.50****	2.15	2.37***	2.17
間主	中国	2.13	2.06	2.18	2.37****	2.00	2.36****	2.20	2.44****	2.13	2.31*
	日本	2.22	2.42****	2.31	2.68****	2.32	2.89****	2.60	3.05****	2.36	2.76****
関係抑	中国	2.21	2.18	2.26	2.27	2.23	2.44****	2.37	2.36	2.27	2.31
	日本	2.19	2.30**	2.24	2.47****	2.25	2.45****	2.26	2.49****	2.23	2.43****
騒ぎ抑	中国	1.98	1.98	2.13	2.07	2.18	2.35***	2.26	2.43***	2.15	2.23***
	日本	2.08	2.08	1.86	2.10****	1.93	2.11**	2.04	2.15	1.98	2.11***
非故意抑	中国	2.51	2.65*	2.64	2.59	2.66	2.81****	2.70	2.62	2.63	2.67
	日本	2.24	2.30	2.20	2.48****	2.22	2.63****	2.51	2.57	2.29	2.50****
先生	中国	2.12	2.04	1.85*	1.67	1.44*	1.29			1.77*	1.63
	日本	2.55	2.64	2.11	2.01	1.66	1.61			2.11	2.06
重要度	中国	2.47+	2.32	2.48	2.61	2.61	2.72	2.45	2.63****	2.56	2.62
	日本	2.62	2.96****	2.75	2.84	3.03	2.97	2.86	3.12****	3.01	3.14****

+ p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.005, \*\*\*\* p<.001

### 3-2 性差および発達的变化に関する日中比較

場面ごとに、国と性と発達段階の3要因に関して多変量分散分析(ANOVA4)を行い、日中間、男女間、発達段階間で比較分析する。日中間、男女間、各発達段階間、3要因間の交互作用はほとんどの方略において有意差を示した。

#### (1) 持ち物の損害場面における比較

Table 5は持ち物の損害場面における社会的問題解決方略と重要度の評定値である(下位検定で男女間に有意差が見られた項目は表中に示してある)。

性差については、直接的攻撃、直接的主張、先生頼りの各方略は男子のほうが有意に高く、表情攻撃、背後攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意性抑制の各方略は女子のほうが有意に高い。重要度は女子のほうが有意に高い。下位検定の結果は表中に示したとおりである。日本のほうが中国より性差が多く見られた。

発達的变化については、Fig. 1に示したとおりである。発達段階が高くなるにつれて、重要性に対する認識が高くなっており、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、非故意抑制が高くなっている。直接的攻撃や直接的主張は中学生において最も高くなっている。一方、先生頼りは発達段階が高くなるにつれて減少している。各方略において、発達段階間に統計的有意差が見られた。日中間は同様の発達的变化傾向が見られた。

場面内各方略間を比較してみると、中国においては、各発達段階で男女共に相手が故意でないため抑制する非故意性抑制が最も高くなっている。日本においては、小学生は男女共に先生頼り、中学生男子は直接的主張、女子は間接的主張、高校・大学生は男女共に間接的主張が最も高くなっている。

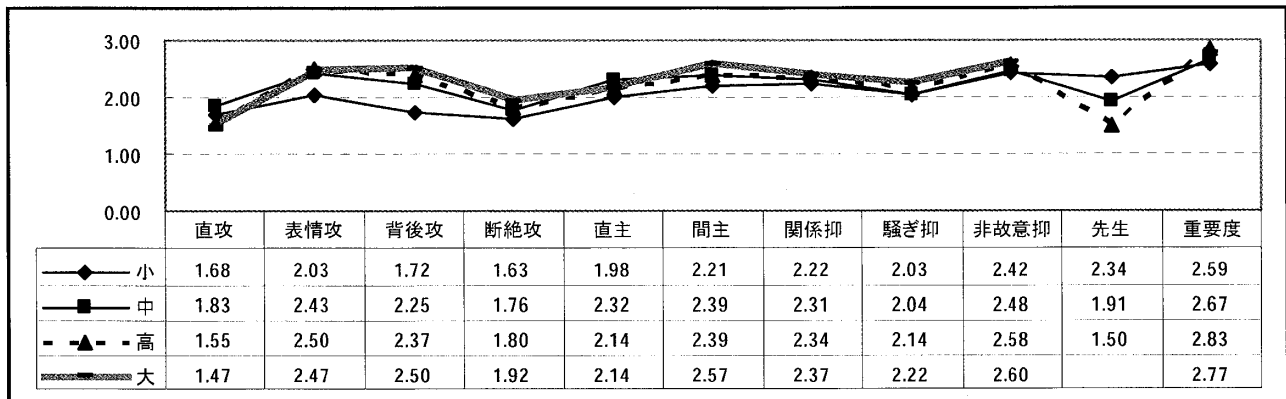


Fig.1 持ち物の損害場面における社会的問題解決方略の発達的变化

#### (2) 級友との意見対立場面における比較

性差については、直接的攻撃は男子のほうが有意に高く、表情攻撃、背後攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の各方略は女子のほうが有意に高い。断絶攻撃、ジャンケンには男女間有意差が見られなかった。下位検定の結果、断絶攻撃は中国において男子が女子より有意に高いが、日本において女子が男子より高い傾向が見られた。間接的主張は中国の小学生において男子が女子より有意に高いが、中国の中・高・大学生において女子が男子よりも有意に高い。重要度は女子のほうが有意に高い。

発達段階が高くなるにつれて、背後攻撃、間接的主張、関係重視抑制が高くなり、直接的攻撃、断絶攻撃は中学生において最も高い。一方、表情攻撃、騒ぎ回避抑制、重要度に対する認

識には発達による変化がみられない。

場面内各方略間を比較してみると、中国においては、各発達段階男女共に直接的主張が最も高くなっている。日本においては、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中・高校生は男女共に直接的主張、大学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張が最も高くなっている。

### (3) 権利の侵害場面における比較

性差については、有意差を示した方略が少ない。断絶攻撃、直接的主張、間接的主張、先生頼り、ジャンケンには有意差が見られなかった。直接的攻撃は男子のほうが有意に高く、表情攻撃、背後攻撃、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、自己責任抑制の各方略は女子のほうが有意に高い。下位検定の結果、断絶攻撃は小学生において男子が女子より有意に高いが、大学生において女子が男子より有意に高い。間接的主張は大学生において女子が男子より有意に高いが、小学生において男子が女子より高い傾向が見られた。ジャンケンは中国において男子が女子より有意に高いが、日本において女子が男子より有意に高い。重要度は男女間有意差が見られなかった。下位検定の結果、日本高校生において男子が女子より有意に高いが、日本大学生において女子が男子より高い傾向が見られた。

発達的变化については、発達段階が高くなるにつれて、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張が高くなっている。自己責任抑制、ジャンケンは発達段階が高くなるにつれて減少している。重要度は発達段階が高くなるにつれて高くなっている。

場面内各方略間を比較してみると、中国においては、小学生女子は自分が離れたことが悪いと思って抑制する自己責任抑制が最も高くなっている。その他の各発達段階は男女共に直接的主張が最も高くなっている。日本においては、各発達段階で男女共に直接的主張が最も高くなっている。

### (4) 名誉の侵害場面における比較

性差については、直接的攻撃、直接的主張、先生頼りの各方略は男子のほうが有意に高く、表情攻撃、背後攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の各方略は女子のほうが有意に高い。断絶攻撃は男女間有意差が見られなかった。重要度は女子のほうが有意に高い。

発達的变化については、発達段階が高くなるにつれて、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制、無意義抑制は高くなっている。直接的攻撃、先生頼りは発達段階が高くなるにつれて低くなっている。

場面内各方略間を比較してみると、中国においては、小・中学生は男女共に直接的主張、高校・大学生は男女共に間接的主張が最も高くなっている。日本においては、小学生は男女共に先生頼り、中学・高校・大学生は男女共に断絶攻撃が最も高くなっている。

### (5) 役割の怠惰場面における比較

性差については、直接的攻撃、先生頼りは男子のほうが有意に高く、表情攻撃、背後攻撃、直接的主張、間接的主張、関係重視抑制の各方略は女子のほうが有意に高い。断絶攻撃、騒ぎ回避抑制は男女間に有意差が見られなかった。重要度は男女間に有意差が見られなかった。

発達的变化については、発達段階が高くなるにつれて、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張が高くなっている。直接的攻撃や直接的主張は中学生において最も多く用いられている。一方、先生頼りは発達段階が高くなるにつれて低くなっている。

場面内各方略間を比較してみると、中国においても、日本においても、各発達段階で男女共に直接的主張が最も高くなっている。

### (6) 先生との意見対立場面における比較

性差については、直接的攻撃、騒ぎ回避抑制は男子のほうが有意に高く、背後攻撃、直接的主張、間接的主張、他人を推薦する方略は女子のほうが有意に高い。表情攻撃、断絶攻撃、関係重視抑制は男女間に有意差が見られなかった。重要度は男女間に有意差が見られなかった。

発達的变化については、発達段階が高くなるにつれて、重要性に対する認識が高くなっており、すべての攻撃的方略、主張的方略が高くなる。一方、抑制的方略は低くなっている。極めて明確な発達の様相を呈している。各方略において、発達段階間に統計的有意差が見られた。日中間は同様の発達の变化傾向が見られた。日中間、男女間との交互作用も見られなかった。

場面内各方略間を比較してみると、中国においては、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女共に直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっている。日本においては、小学生男子は他人を推薦する間接的主張、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女共に直接的主張が最も高くなっている。

#### 4. まとめと考察

##### (1) 性差について

今回の調査では、直接的攻撃、先生頼りはすべての場面において、男子が女子より有意に高い。表情攻撃、背後攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制はすべての場面において、女子が男子より有意に高い。直接的主張は、持ち物の損害および名誉の侵害場面において男子が女子より有意に高く、級友との意見対立、役割の怠惰および先生との意見対立場面において女子が男子より有意に高い。

発達段階が高くなるにつれて、間接的方略、抑制的方略が高くなり、先生頼りという権威志向が低くなる傾向と照らして考えると、道徳性や社会性の発達においては女子のほうが早い(荒木, 1988; 山岸, 1976, 1995)ことが伺える。状況を見極め、直接に主張したり、間接的に対応したり、抑制したりする社会的スキルは、女子が男子より早く習得していると考えられる。

##### (2) 発達的变化について

今回の調査では、発達段階が高くなるにつれ、先生の権威性が低くなり、先生の権威を借りた問題の解決をすることが少なくなる。先生との意見対立場面においても、発達段階が高くなるにつれ、攻撃的方略および主張的方略が高くなり、抑制的方略が低くなっている。

中学生になると、対人葛藤の問題の重要性に対する認識が最も高くなっており、直接的攻撃や直接的主張が多くなる傾向が見られる。中学生という発達段階は、思春期を迎え、疾風怒濤のいわば心身の安定性を欠く時期であり、過敏・衝動的になりやすいことが反映した結果と考えられる。

全般的には、間接的攻撃、主張的方略および抑制的方略は発達の段階の上昇とともに増加する傾向が見られる。

##### (3) 場面間の差異について

持ち物の損害場面では、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制が各発達段階を通して、他の場面より最も高くなっている。相手の非故意性が考慮され、金銭的利益よりも友人関係を重要視する意識、金銭的トラブルに恥じることもあり、直接的に対決することがしにくくなると考えられる。相手の敵意(故意性)の有無により解決方略が異なることは6歳児からすでに見られる(丸山, 1999)。偶発によって生じた葛藤は、6歳児が4・5歳児よりも消極的反応(場面からの逃避、回避、無視或いは無反応)、いわば自己抑制的な対応を多く行っている。

級友との意見の対立場面では直接的攻撃、表情攻撃、背後攻撃が他の場面より最も低くなっ

ている。この場面で最も多く用いられている方略は日中間、発達間で異なる様相を呈している。

権利の侵害場面では、背後攻撃、断絶攻撃が他の場面より最も高くなっている。この場面の侵害は相手の意志によるもので、相手への不満も高まるが、直接対決では喧嘩を招く可能性が予測できるため、捌け口として背後攻撃、断絶攻撃で表出されていると思われる。

名誉の侵害場面では、各発達段階を通して最も重要視され、表情攻撃も他の場面より最も高くなっている。権利の侵害と同様に、直接対決では効果も少なく喧嘩を招く可能性が予測できるため、表情や態度で不満を示したものと思われる。この場面で最も多く用いられている方略は日中間、発達間で異なる様相を呈している。

役割の怠惰場面では、重要性を高く評価していないにも関わらず、直接的攻撃が各発達段階を通して、他の場面より最も高くなっている。直接的主張も他の場面より高くなっている。役割の遂行は社会的に要求されており、その怠惰が自分に迷惑を及ぼし、社会的にも認められないため、攻撃や主張しやすくなると考えられる。この場面で最も多く用いられている方略は、中国も日本も、各発達段階を通して直接的主張である。

先生との意見の対立場面では、重要度は各発達段階において差が少ないが、各方略の使用は発達段階間、日中間で大きく異なっている。

#### (4) 日中間の相違について

①全体的にみると、騒ぎ回避抑制は中国のほうが高く、そのほかの直接的攻撃、断絶攻撃、直接的主張、間接主張、関係重視抑制、先生頼り、ジャンケンのすべての方略において、日本のほうが高い。静かで穏やかな日本とにぎやかでトラブルの多い中国という一般的イメージに反して、日本の対象者のほうが積極的に問題解決したり、自己防衛したり、相手との関係を保つため抑制したりする傾向が強い。子どもの社会的スキルは日本のほうがより発達しており、そのため、喧嘩せずに穏便に事を運ぶことができ、穏やかな人間関係を築けたのではないかと考えられる。中国では、個性を重視し、自分の独自の考えや意志を持つことが評価される一方、衝突を抑えるため、些細なことでは波風を立てないことも社会的に大変評価されている。このような社会的価値観が子どもたちの騒ぎ回避意識に結びついたのでないかと思われる。

②各場面で最も高くなっている方略は日中間で大きく異なっている。その背景には中国と日本のそれぞれの社会的価値観が作用していると思われる。

持ち物の損害場面では、中国は、各発達段階で男女共に非故意性抑制が最も高くなっているが、日本は、小学生は男女共に先生頼り、中学生男子は直接的主張、女子は間接的主張、高校・大学生は男女共に間接的主張が最も多く用いられている。耐えられる範囲内の損害を受けたさい、中国では相手の非故意性が大きく受け止められていることがうかがえる。それと同様に、自分の非故意によって他人や社会にかけた迷惑に対しても、自分は悪意がないと思って、大目に甘く見てしまう傾向がある。「中国人は謝らない」という日本人が抱いている一般的イメージは、このような中国人の価値観がその一因として働いているのではないかと考えられる。

級友との意見対立場面では、中国においては、各発達段階で男女共に直接的主張が最も高くなっている。日本においては、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中・高校生は男女共に直接的主張、大学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張が最も高くなっている。また、中国においては、級友との意見対立場面が他のすべての場面より重要視され、直接的攻撃、直接的主張が日本より有意に高く、他の場面の結果とは逆転している。中国は広大な国土に56民族が混住しており、各民族がそれぞれの言語と文化を持っている。そうした背景を持つ中国の人々は確固たる自己を持つことが大切とされ、「個性」には高い評価が与えられ、「個性

がない者」には価値が認められない。したがって、意見が対立した場合、自分の考えや意見を貫いていく態度が形成されやすいと考えられる。また、意見の対立は情緒的反応に結びつきやすく、攻撃的行動として表出されやすいと思われる。一方、日本では上手に他人の意見に同調することは人間関係を円滑にするための必要なスキルの一つである。

名譽の侵害場面では、中国においては、小・中学生は男女共に直接的主張、高校・大学生は男女共に間接的主張が最も高くなっている。日本においては、小学生は男女共に先生頼り、中学・高校・大学生は男女共に断絶攻撃が最も多く用いられている。日本では不満を持つ相手に対して、対決して相手との関係をうち壊すよりも、波風を立たずに淡々と関係を絶つことのほうが好まれるのであろう。

先生との意見対立場面では、中国においては、小学生男子は関係重視抑制、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女共に直接的主張と他人を推薦する間接的主張が極めて近い値で最も高くなっている。日本においては、小学生男子は他人を推薦する間接的主張、女子は直接的主張、中学・高校・大学生は男女共に直接的主張が最も多く用いられている。日本では他の適任と思われる人を推薦する効果的な方略を避けていることは、推薦されている人との人間関係への影響、推薦することが相手への迷惑だという思いがあるからと思われる。

③小学生で日本のほうが有意に高い直接的攻撃、直接的主張は発達に伴い、大学生では日中間に有意差が見られなくなった。小学生で有意差が見られなかった背後攻撃は、発達に伴い、大学生では日本のほうが有意に高くなった。小学生で日本のほうが有意に高い断絶攻撃、間接的主張は、発達による変化がなく、大学生でも日本のほうが有意に高い。各場面で最も高くなっている方略は、中国においては抑制方略以外、ほとんど直接的主張である。発達に伴い直接的方略から間接的方略へと変化する傾向はあるが、社会に仲間入りする直前の中国大学生と日本大学生のこの違いは、社会性の発達度の違いによるというよりも、日中間の社会的価値観の違いによると考えたほうが妥当であろう。中国では、心のうちを隠さないことが「光明磊落」（公明正大、磊落）と言われ、社会的に大変評価されている。直接的方略を好むのはこのような価値観が背景に働いているものと考えられる。

④男女間に有意差が見られた方略は、中国のほうが日本より少ない。社会的問題解決方略だけでなく、子どもが男か女かによる親の養育態度にも、中国は日本より違いが少ない（羅, 2007）。現在の中国は男女共働き社会であり、一人っ子社会でもある。男女差が少なくなるのも自然の流れであろう。

## References

- 東敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究—けんかおよび援助状況の解決と社会的コンピテンス 教育心理学研究, 40 (1), 64-72.
- 東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会
- Alberti, R. E. & Emmons, M. L. 1970 *Your perfect right: A guide to assertive behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers, Inc. (菅沼憲治・ミラーハーション訳 1994 自己主張トレーニング 東京図書株式会社)
- 荒木紀幸 1988 道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践 北大路書房
- 二神多栄・神谷ゆかり 2004 中学生の対人葛藤場面における処理方法の理由付け 安田女子大学大学院文学研究科紀要 教育学専攻, 9, 151-165.

- 徐甫潤 2004 小学生の社会的問題解決方略における日韓比較 人間科学研究, 11, 49-64.
- 徐甫潤 2005 対人葛藤場面における社会的問題解決方略に関する発達的研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, 4, 1-11.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- 嘉数朝子・前原武子・金城洋子 1991 児童の社会的問題解決能力—社会測定的地位や親和動機づけとの関係 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, 38, 339-346.
- 金城洋子・梅本堯夫 1991 児童における対人交渉能力の発達 発達研究, 7, 115-134.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係 発達心理学研究, 3 (1), 1-8.
- 小森千世・宮本正一 1992 相手の性別・年齢が対人的葛藤解決に及ぼす効果 岐阜大学教育学・心理学研究紀要, 11, 181-192.
- 子安増生・鈴木亜由美 2002 幼児の社会的問題解決能力と「心の理論」の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 63-83.
- 羅蓮萍・堂野佐俊 2005 社会的問題解決に関する発達心理学的研究：日本における研究の動向 山口大学教育学部研究論叢, 55, 171-187.
- 羅蓮萍 2007 中国と日本における親子関係の発達的变化 東アジア研究, 5, 55-66
- 丸山(山本)愛子 1999 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達的研究 教育心理学研究, 47, 451-461.
- 箕浦康子 1990 文化の中の子ども 東京大学出版会
- 王少鋒 2000 日・韓・中三国の比較文化論：その同質性と異質性について 明石書店
- Phelps, S. & Austin, N. 1975 *The assertive woman*. San Luis Obispo, California : Impact Publishers, Inc.
- 佐藤淑子 1991 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較 発達研究, 7, 145-165.
- 佐藤淑子 1993 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較—結果と考察 発達研究, 9, 41-60.
- 佐藤淑子 1994 英国在住の日本人就学前幼児の異文化学習—社会的場面に於ける「自己制御」の発達の日英比較—母親の質問紙の分析結果 発達研究, 10, 17-29.
- 佐藤淑子 2001 イギリスのいい子・日本のいい子 中央公論新社
- 渡部玲二郎 1993 児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人交渉方略の関連性 教育心理学研究, 41(4), 452-461.
- 山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理学研究, 24, 29-38.
- 山岸明子 1995 道徳判断の発達に関する実証的・理論的研究 風間書房
- 山岸明子 1998 小・中学生における対人交渉方略の発達および適応感との関連—性差を中心に 教育心理学研究, 46(2), 163-172.
- 吉武久美子 1991 ひくことが持つ優位性—自己主張と対人関係円滑化を両立させるための対人的コミュニケーション方略 心理学研究, 62 (4), 229-234.
- 吉野絹子 1987 対人的葛藤の解決過程の分析(1)—葛藤に対する反応パターンとその類型化 社会心理学研究, 2 (2), 35-44.